北日本新聞　（第3種郵便物認可）

知りたい！ 治療の最前線 ◇15

地域と大学の協働

住民参加型システム築く

高齢になっても住み慣れた地域で暮らし続けるための仕組みとして、国は「地域包括ケアシステム」の構築を進めています。背景に、2025年に高齢化率が30％に達するとされる超高齢社会の到来があります。富山大附属病院では、大学の地域貢献の一環として、このシステムに関するさまざまな課題に取り組んできました。

一口メモ

地域包括ケアシステムは、高齢者が住み慣れた地域で自分らしい人生を全うできるよう、医療や介護だけでなく、介護予防や見守り、買い物代行といった生活支援などが一体的に提供される体制。国は自治体に対し、団塊の世代が75歳以上になる2025年をめどに整備を促している。

山城 清二
富山大附属病院教授
総合診療部長

人材育成へ勉強会

富山大附属病院が南砺市福野地域で開いた地域医療再生マイスター養成講座＝2012年

約12年前、全国で地域医療の危機が脚光を浴びました。富山県でも医師不足や診療科の偏在の影響で、南砺市の医療崩壊（小児科や産婦人科の縮小）が新聞などで報道されました。

現状理解し行動

そのような中、南砺市から当院に診療応援と地域医療の再生の依頼を受けました。全国の取り組みを調べた結果、対応策として二つのことが重要であると考えました。一つは「地域で医療職を育てる」こと。もう一つは、住民も現状を理解し共に行動してもらう「住民参加型システム」を構築することです。

住民参加型システムとして、福野の診療所で診療する傍ら、初めは住民向けに医療の実情を説明するセミナーを始めました。2年間で8回開催しましたが、一方的な講義では住民の意識を変えることはできず、何の行動も起こりませんでした。

そのような行き詰まった状況で幸いにも、「地域再生システム論」という理論を知ることになり、新しい方法論として「地域医療再生マイスター（人材）養成講座」を開設しました。医師や看護師などの医療職、行政の職員、住民ら約50人が参加し、2カ月半かけて5回（1回2時間半、講義と討論）の勉強会を行いました。

この講座では、意識改革と行動変容の方法を学び、対話を重視したグループ討論を行ったほか、最後には一人ひとりが地域や自分の課題への取り組みを発表しました。第1期のマイスター養成講座の終了後、「南砺の地域医療を守り育てる会」を立ち上げ、情報交換を兼ねた年3回の講演会を企画しました。その後の10年間で養成講座は10期継続し、428人の修了者を出しました。地域医療を守り育てる会も30回開きました。

医療崩壊脱する

地域での医療職の育成として、南砺市民病院に医師養成プログラムを立ち上げ、同時に訪問看護師向けの診察法を含めた勉強会を開いたところ、5年目には医師、看護師が増えて、やっと医療崩壊から脱することが出来ました。住民側も「住民マイスターの会」を立ち上げ、地域の中で健康サロンや認知症への回想法などの活動を開始し、住民参加型の形が目に見えるようになってきました。

6年目からは同じ方法論が、富山市、高岡市、朝日町へ広がり、10年間で千名を超える地域や医療のことを考える人材が育ちました。8年目からは飛騨市が加わり、11年目の現在は4自治体が継続しています。さらに、今年の夏には台湾から招待を受けて、台湾大と台東地域で我々の取り組み・方法論を紹介してきました。

今日の地域医療の再生や活性化には、医療職や行政職とともに、地域の住民の参加が最も重要です。そこに大学が加わり新しい方法論などを取り入れて人材育成をする、つまり地域の三者と大学が協働で、地域の課題に取り組むことが成功の鍵になると思っています。

◇

次回は8日に掲載します。